



都繪馬鑑  
五

~~E~~  
15  
5

道通文庫  
文庫 6  
1307  
5





都繪馬鑑五之卷

先小扁額軌範初編發行とてりども馬傳河圖の今より尺補ふも  
附録とて着る君子初編と澤々合着は下

○遊女之圖

清水

元禄十年

山本傳六画



詩周南云漢有游女不可求倭名抄は漢語抄を引て遊女の遊女  
とて女児たり一云直遊女とて夜を待て遊女は夜を待て  
秋夜と云々。遊女とてあまのこゝ人の遊女に連るものなりと云う。今  
通とて遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とて  
浪とて遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とて

○一況とて年取ハ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とて  
門の赤字播磨の室の津とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とて  
津とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とてあまのこゝ遊女とて







平治物語云々... 僧正... 我師記... 俊也... 怪来... 日... 守... 幸... ち... 一... 邪...

○一洗... 牛... 一... 長... 竹... 良... 平... 其... 鞍馬... 其... 堵... 僧... 細...







寛文二年とあり

前編小僧如く。今に至り百五十餘年。男女の衣被深換振髪（カマ）の容（かたち）古  
推（おし）る半（かた）其時の風俗（ふうぶく）を思（おも）ひきよの古（ふる）に画（え）すてい初（はじ）まは深（ふか）くは深（ふか）く深（ふか）  
換振髪（カマ）の儀（ぎ）様（さま）年々（としとし）月々（つきつき）かろりそのこと予（よ）先（ま）米（め）の恩（おん）と銘（めい）り喜（よろこ）ぶ古（ふる）代（しろ）の  
婦人（ふじん）の風俗（ふうぶく）を二（に）画（え）と書（か）り。移（うつ）り代（しろ）をかつ。風俗（ふうぶく）深（ふか）換振（カマ）髪（カマ）のよぬれ  
華（は）りたる侍（さむらい）を要（もと）す馬（うま）と日（ひ）梓（し）紗（さ）とんを給（たま）ふ

○正月小児の弄戯小男児と毬打（たまり）。女児と絲（いと）毬（たまり）羽（は）根（ね）瓜（うり）けを正月乃  
我（われ）のこころ

○毬打（たまり）を顕（あ）照（て）神（かみ）中（ちゆう）抄（しやう）云（い）。十（じゅう）前（ぜん）孫（そん）云（い）。黃（わう）帝（てい）。蚩（し）尤（ゆう）が頭（かぶ）を敷（し）き毬（たまり）今  
の毬（たまり）杖（じやう）をケリ。彼（か）例（れい）と云（い）。漢（わん）土（ど）年（ねん）始（し）に件（けん）の事（こと）瓜（うり）用（もち）由（よし）圓（えん）中（ちゆう）函（わん）車（しや）ふ。依（よ）り  
日本國（にっぽんこく）其（その）例（れい）をまて毬打（たまり）と打（うち）と云（い）。世（よ）後（ご）同（どう）言（ごん）也（なり）又（また）蚩尤（しゆうゆう）のこころと云（い）。  
續（つづ）日本紀（にっぽんぎ）云（い）。聖（せい）武（ぶ）天皇（てんかう）神（かみ）龜（かめ）四年（しに）正月（しげつ）教（しやく）王子（おうじ）諸（しよ）臣（しん）の子（こ）等（ら）と。春（はる）り佳（よし）

小毬（こたまり）のひく打（うち）毬（たまり）の樂（たの）儀（ぎ）修（しゆ）りま（ま）古（ふる）く修（しゆ）りものなり

滑（わ）稽（き）音（おん）雜（ざ）抄（しやう）云（い）。万（まん）葉（えふ）に玉（たま）きりりと泳（およ）るも年（ねん）始（し）の毬打（たまり）と云（い）。日本（にっぽん）少（せう）い本（ほん）  
て造（つく）る近（ちか）頃（ころ）のより之（これ）必（かなら）竟（ま）今（いま）世（よ）女子（にょし）の好（この）ぶ毛（け）毬（たまり）瓜（うり）込（こ）込（こ）考（かう）る昔（むかし）の本（ほん）毬（たまり）  
と本（ほん）毬（たまり）のありと云（い）。後（ご）成（じやう）恩（おん）寺（じ）殿（でん）の世（よ）後（ご）同（どう）言（ごん）に本（ほん）丁（てい）と拵（しやう）ぶられ  
るも其（その）頃（ころ）も本（ほん）毬（たまり）のや唯（ただ）男（おとこ）児（こ）の好（この）ぶ地（ぢ）と云（い）。同（どう）小（せう）擲（てき）便（べん）るん後（ご）鳥（とり）羽（は）院（いん）  
の雅（みやま）き山（さん）時（じ）に海（うみ）介（かい）毬打（たまり）瓜（うり）好（この）む給（たま）ひされば又（また）是（こゝ）上（かみ）人（ひと）被（ひ）あつて柳（やなぎ）毬（たまり）のよぬれ  
給（たま）ふては帝（てい）天（てん）毬打（たまり）の符（ふ）者（しや）と罵（のの）りしと云（い）。年（ねん）家（け）お流（なが）れり又（また）後（ご）は振（しん）  
と稱（なづ）して毬（たまり）瓜（うり）のなり。毬（たまり）杖（じやう）と云（い）。杖（じやう）の先（さき）は付（つ）りもの。古（ふる）代（しろ）の古  
来の換振（カマ）ふ姿（すがた）とて二（に）三（さん）歳（さい）の幼（こ）見（み）ぬがた毬打（たまり）と紙（し）と又（また）を唐（たう）板（ばん）に帖（てい）し。朝（あ）  
急（あ）松（ま）行（ぎやう）を造（つく）る。是（こゝ）瓜（うり）毬打（たまり）小（せう）限（げん）と申（まを）ふ稱（なづ）す。其餘（そのあ）を玉（たま）振（しん）と云（い）。各（おの）別（べつ）の  
ふたなる非（ひ）なり。つとて本（ほん）丁（てい）と稱（なづ）す。今（いま）玉（たま）振（しん）と云（い）。即（すな）ち考（かう）らうの  
毬（たまり）瓜（うり）。其（その）形（かたち）玉（たま）と大（だい）戸（こ）小（せう）付（つ）り唐（たう）車（しや）のこ。宝（たう）の肉（にく）れしと考（かう）らうのぬれ



寛文二年清水寺後堂に招き正月浴中路上の羽子  
初編にゆくと只も字のよめりより亦有てまふ抄あり

○試は正月元日より初。正月申男児たす日  
立列也其言み六つ八隔くお面ふ列えり。  
ふつに増る玉と板一五玉と揃く  
猪若を繕ふけ玉列えりしうほり  
そのたあつてつれはかまらうあひ  
よのたゆとゆとをさるるいふと  
ちく御多は天上玉と揃く葉と。  
まろくは面にあり。おんこしとていふかき。  
け試は正月申男児一御毎二二三あつ  
やどあつて年終のたを遊りやもいふが  
玉浴の海に流る泥とを五一衣を  
得やとともあつてなけおあつ  
あふくあつてさるるあつ



○一説は羽子板を  
神功皇后の指板と  
まけて女児の歌といふ

けりあつては羽子板の  
こい足利家付けり  
其名又さる。  
まゆとあひ



○胡鬼板の異國よは試  
あつては毛糸流るるさる

○羽子板のまゝはたはたの肉との  
板の作裏は櫻竹の作と重き。  
よは板とまゝはたはたの作と重き。  
まゝはたはたの作と重き。

○羽子板 胡鬼板ともさる  
このまゝはたはたの作と重き。  
板の作裏は櫻竹の作と重き。  
よは板とまゝはたはたの作と重き。  
まゝはたはたの作と重き。







△強<sup>あ</sup>いふ<sup>ま</sup>あ<sup>ま</sup>し<sup>り</sup>あ<sup>ま</sup>ま<sup>ま</sup>と  
 慶<sup>う</sup>白<sup>はく</sup>一<sup>いつ</sup>奔<sup>ほん</sup>の<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>守<sup>まも</sup>り  
 産<sup>う</sup>川<sup>がわ</sup>有<sup>あ</sup>志<sup>し</sup>し<sup>り</sup>よ

う<sup>う</sup>り<sup>り</sup>白<sup>はく</sup>中<sup>ちゆう</sup>や  
 皆<sup>みな</sup>お<sup>お</sup>身<sup>み</sup>の<sup>の</sup>ぢ<sup>ぢ</sup>ん  
 と<sup>と</sup>唱<sup>な</sup>う<sup>う</sup>方<sup>かた</sup>俵<sup>はたけ</sup>や  
 政<sup>せい</sup>の<sup>の</sup>糸<sup>いと</sup>を<sup>を</sup>進<sup>すす</sup>め  
 け<sup>け</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ご

ま<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>御<sup>ご</sup>守<sup>まも</sup>り  
 妻<sup>つま</sup>の<sup>の</sup>糸<sup>いと</sup>を<sup>を</sup>進<sup>すす</sup>め  
 け<sup>け</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>ご



女の赤<sup>あか</sup>靴<sup>くつ</sup>と<sup>と</sup>古<sup>こ</sup>代<sup>だい</sup>の<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>か<sup>か</sup>の<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>守<sup>まも</sup>り  
 紅<sup>べに</sup>晒<sup>しやう</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>女<sup>め</sup>を<sup>を</sup>穿<sup>く</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 科<sup>しや</sup>陀<sup>た</sup>や<sup>や</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>女<sup>め</sup>を<sup>を</sup>穿<sup>く</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 夏<sup>なつ</sup>は<sup>は</sup>夏<sup>なつ</sup>六<sup>む</sup>の<sup>の</sup>以<sup>も</sup>り<sup>り</sup>嫁<sup>よめ</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 竹<sup>たけ</sup>入<sup>い</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 純<sup>じゆん</sup>の<sup>の</sup>袴<sup>はかま</sup>を<sup>を</sup>穿<sup>く</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>

○九<sup>く</sup>日<sup>にち</sup>り<sup>り</sup>十<sup>じゆ</sup>又<sup>また</sup>日<sup>にち</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>或<sup>ある</sup>を<sup>を</sup>五<sup>ご</sup>前<sup>ぜん</sup>白<sup>はく</sup>被<sup>ひ</sup>居<sup>ゐ</sup>る  
 紫<sup>むらさき</sup>目<sup>め</sup>の<sup>の</sup>被<sup>ひ</sup>居<sup>ゐ</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>被<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>白<sup>はく</sup>中<sup>ちゆう</sup>と<sup>と</sup>呼<sup>よ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>面<sup>めん</sup>を<sup>を</sup>  
 露<sup>つゆ</sup>の<sup>の</sup>布<sup>ふ</sup>を<sup>を</sup>持<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>洗<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>洗<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 門<sup>かど</sup>の<sup>の</sup>下<sup>した</sup>俵<sup>はたけ</sup>と<sup>と</sup>未<sup>み</sup>洗<sup>せん</sup>と<sup>と</sup>  
 と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>洗<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>と<sup>と</sup>洗<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 産<sup>う</sup>川<sup>がわ</sup>有<sup>あ</sup>志<sup>し</sup>し<sup>り</sup>よ

○三<sup>さん</sup>進<sup>すす</sup>め<sup>め</sup>の<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>守<sup>まも</sup>り  
 被<sup>ひ</sup>り<sup>り</sup>ビ<sup>び</sup>ン<sup>ん</sup>ザ<sup>ざ</sup>ラ<sup>ら</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>洗<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 吸<sup>す</sup>い<sup>い</sup>の<sup>の</sup>時<sup>とき</sup>の<sup>の</sup>洗<sup>せん</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>  
 袴<sup>はかま</sup>を<sup>を</sup>穿<sup>く</sup>き<sup>き</sup>る<sup>る</sup>を<sup>を</sup>や<sup>や</sup>め<sup>め</sup>し<sup>し</sup>て<sup>て</sup>







國八郎文田彦七平賀三郎等山伏の婆は或く十津川の婆は或く  
僧奉一も戸世兵衛志兵衛順道憐の郷民を如くお慈願別南之西  
同く文代佐本頼引せし村人免大塔文を討ち奪者には伊勢乃  
車の店に或る心子の人を討者五百貫文にらるるを方頼福け  
且六郎を強盜の郷民等忽らぬに及べば又十津川をわたり  
此の方へ或る所へ出たる草津中津川を難おやう時款さるる冷房ふ  
く歌草津原月が許お付してたを求め終ふは司書て云又法道し  
せん事種念ふ因ふに飛科津村より扶ふ。又文を奪る人も思は  
りては河世の内一兩人強つて武家へ渡らう。又河原氏終るる合  
はる音のたもんまも叶ふ一矢はまくと申さる。赤松律師刻銘を  
押さ事小代さるるおもんさるる平賀三郎が告にまうせ。河原氏を  
トさる。又遠にさるる村と表四郎と遠の道よりて進付んとる

ぐお小草津は日日月を金銀少く付る綿の河原をさるるゆふ合  
村上博く回へおくのようを告ぐ。村上大女怒り。羽取道舟の河首途大  
凡下れ奴系がた孫の事信づたやや方と河原を引奪いお終おる人  
の男は抗ぐ。四五丈斗。拗たれは怪力な女は草原原月を始免召致はく  
て近回。村と河原をたそまふ進付は。まはくさるる。  
○二王力競く國 清水寺  
寺院の門に力士の像あり。是代二王とらたを左輔金剛右を右禪金  
剛とらふ  
釋氏要見云法秀禪師 年中 初免建業寺より 祇桓寺に 禪小僧  
死神の像を画く。今も代後ふらるる  
正法念經云昔國王あり。第一の夫人二子を生じ。其第二の梵王とて。千兄の餅を清  
試んと欲し。第二の夫人二子を生じ。其第二の梵王とて。千兄の餅を清







中とらりは修馬小画く其頃の内婆成すべきものなり

園多小比小考をこ編よ出せとをふりけ

○前編小写し出に和の園を奥院小指ありて寛永十一年未古和由

客衆中しあり。寛永十一年の九艘の和をも止め流りし年をう未古和由

何とこの園乃和持ありあふふ九艘乃外あり遊く考

○帆のよ小和園の人あり。世よこは黒坊より今も和園乃和由

して和中の働を和あり自左和滑とま

○黒坊を和海の内咬咄吧榜葛刺。レイス。ローキス。ロワル等の土人あり

日小近死和生うくやをこ其まう。西洋語は和スワルトコ

ゴト云是里をこあひ者よりふり。性愚うとかけり船乃とま

○都良香 紙園

享保九年 望月勘助画

○天正の頃だこの年和ありし時紙よ

まて音武の和ありひい竹をまてま

和を和を盛てまて其後和を和の

和の和をまて音あり。和のまを和の

初め和を和を止あり。和のまを和の

和の和を和あり。寛永十一年の和を免されて

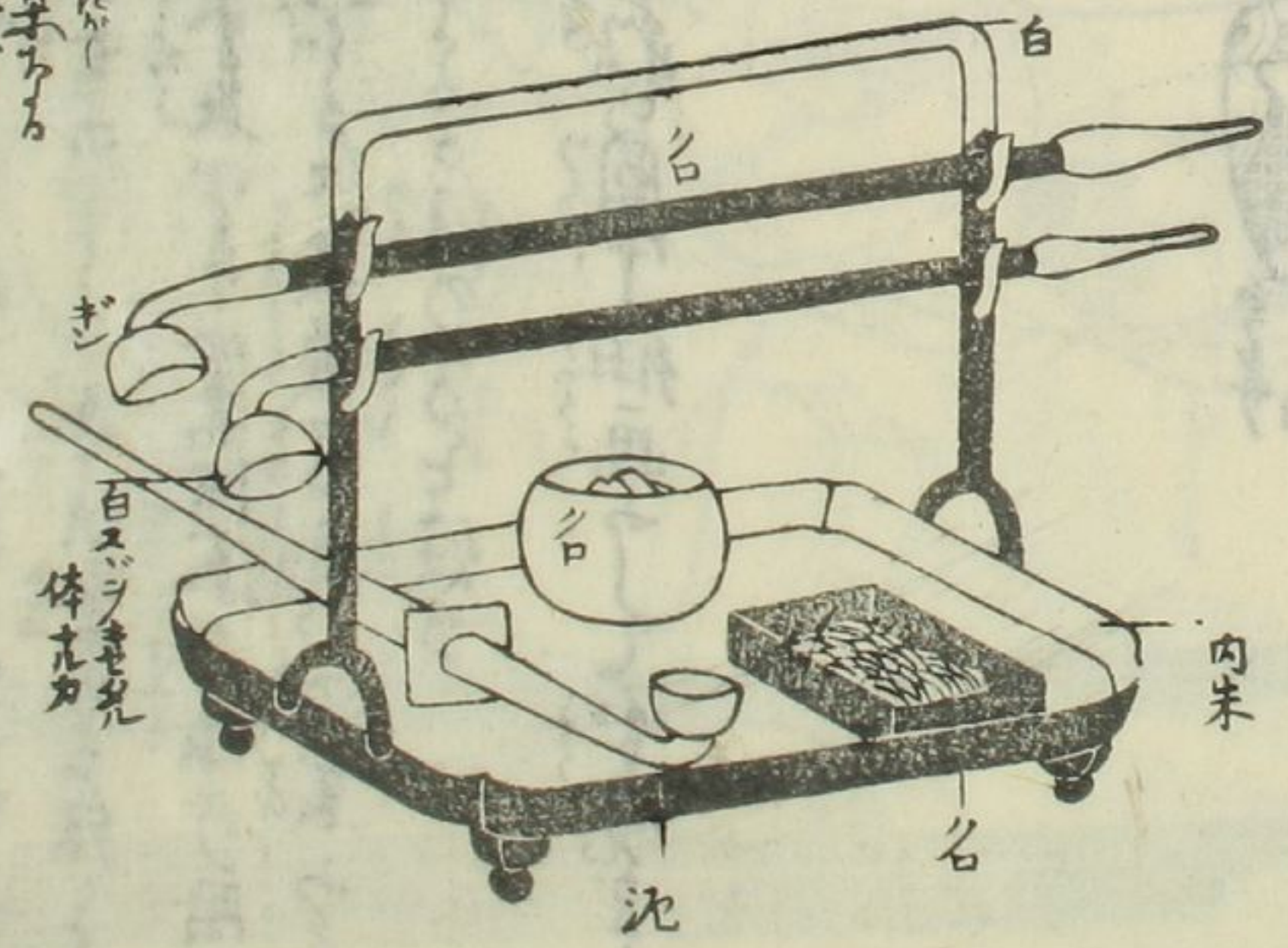
和の和を和あり。和の和を和あり。

和の和を和あり。和の和を和あり。

和の和を和あり。和の和を和あり。

和の和を和あり。和の和を和あり。

和の和を和あり。和の和を和あり。



○園よとて水の頃を。和の和を和あり。和の和を和あり。

者。或封體を通り。和の和を和あり。和の和を和あり。

和の和を和あり。和の和を和あり。和の和を和あり。









大つとく草玄 正保の頃までいふにわかれ  
 九段にまでいふにわかれ 正保の頃までいふにわかれ  
 大つとく草玄 正保の頃までいふにわかれ  
 大つとく草玄 正保の頃までいふにわかれ

坂道のついで



正保の頃までいふにわかれ  
 九段にまでいふにわかれ  
 大つとく草玄 正保の頃までいふにわかれ  
 大つとく草玄 正保の頃までいふにわかれ

この人は、男とのついでにわかれ  
 正保の頃までいふにわかれ  
 大つとく草玄 正保の頃までいふにわかれ

坂道のついで



△義元の國は信水寺に掛かる所の信元といふ寺なり

正保四年の事

宋書五行志云男婦俱有晋の威寧  
大康の時に起る女色よりいふや  
五雜俎云男色の真なりし何れ  
頑童に比するの戒なり。知んぬ  
上古に御する事と晋に至る  
大に盛なりて京師乃男子を  
奉て自ら負ふの者  
唐宋より己に  
これより今京都  
小唱ありや  
縉紳の酒席に  
彼も官伎殿よ



禁されどもいかに  
明朝も盛なり  
うらむ。幸なり  
古くを滅の源なり  
あ。中世より天正より  
義元の時をさるる  
や。其頃より或人の犯す  
男色の事なり。元  
ゆめなり。信元  
山にあり。信元  
妹を討つ。信元  
せ。其のいふ。又  
其の法も。其のいふ。又  
其の法も。其のいふ。又





或は風流画にも  
清水寺に掛る馬  
あもてぬ。かまよ  
減るは流る  
今も流る其こ  
かまよてかまよ  
こしなり



傳云都良香と都腹赤の子とて當時乃香の才儒ありて文人たり。菅原  
相模廣相巨勢文雄等と上下の激論あり。清和帝に仕へて桂下あり  
翰林にありて元慶三年小段に治る。本約室保乃ひらぬ集に在り。其  
後人良香河大孝子の完兒見る者あり。世に傳ふ良香富士大孝に  
入るは、伝とさるやと知れば然りや。香やま

○古老説云良香或時と氣霽風梳新柳髪とつる句は、作ていま  
下の句は、作をたひて。羅生門のあはれさるに鬼樓上より聲とて氷清浪  
洗旧苔鬚とさ下の句は、云々。良香怒とさる。菅原相とさる。か  
詩を、作ていよと中とさる。ひが言ひり下の句は、鬼のつけると社まひと作  
とさる。良香河大孝子の完兒見る者あり。世に傳ふ良香富士大孝に  
入るは、伝とさるやと知れば然りや。香やま

○此詩朗詠集に早春の詩よ出て都良香が作とさる



○詩の意々々人の癖... 乃柳を吹き... 髪を揺るふ... 似若き...

○蘭亭圖

寶曆四年

池奥名

大推堂... 乃以字代... 成九... 乃以字代... 九霞山... 推...

蘭亭... 漢王紹興... 乃... 清流激湍... 映... 亭...

○事文類聚別集十二... 云何... 延之... 園... 記... 云... 景... 亭... 晉の右軍將軍

會稽... 內史... 琅琊王... 羲之... 字... 逸... 少... 此... 書... 如... の... 詩... 序... 右... 軍... 蟬... 聯... の... 美

曹... 之... 蕭... 散... の... 名... 實... 之... 晉... 穆... 帝... 永... 和... 九... 年... 暮... 春... 之... 日... 之... 日... 大... 原... 孫... 綽... 與... 公... 廣... 漢... 王... 彬... 之... 弟... 凝... 徽... 徵... 揮... 之... 等... 早... 有... 二... 人... 被... 襖... の... 後... を... 脩... 之... 亭... 以... 揮... の... 序... を... 制... 之... 之... 云

○王羲之蘭亭之記云

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂下畧

永和九年歲在癸丑暮春之初會于會稽山陰之蘭亭脩禊也群賢畢至少長咸集此地有崇山峻嶺茂林脩竹又有清流激湍映帶左右引以為流觴曲水列坐其次雖無絲竹管絃之盛一觴一詠亦足以暢叙幽情是日也天朗氣清惠風和暢仰觀宇宙大俯察品類之盛所以遊目騁懷足以極視聽之娛信可樂下畧

○仁田四郎忠常斬猪圖

祇園

元祿十五年 海小友實齋画

建久四年五月廿八日賴朝卿... 乃... 野... 狩... 時... 小... 幸... 田... 大... 猪... 之... 文... 四



















満ちては藍乃ぞ〜

○旧来本紀云孝靈天皇三十六年正月駿河國東南少刺園中大海出一夜海中より大虫出づ埋む一日天より雲降る終土炭續像八坂覆の如し又積米田原をやく終頂に天女見る十五の童た有る又鬼伯天の兵た有る

○每六月上旬より七月小至と云ふ登る事以降る其頂上事少煙氣あり四時雪消凡唯六月十五日の一日消く其夜ま〜降る

○侍云孝灵天皇五年夏五土山始く〜蓋一江凡湖一極は酒出〜其夜多土山より出づ今小江原の人〜七日終る其夜の合百日際有〜時を込にの土山ま〜

○新集に云是赤人の歌

天は地乃 けり〜 終る〜 なる〜 する〜  
地乃のち けり〜 終る〜 なる〜 する〜

○宝永四年十月廿日は〜 富士の山〜 漢土も富士を〜

○富士山と云烟毎双り名ふ〜 漢土も富士を〜

○宝永四年十月廿日は〜 富士の山〜 漢土も富士を〜







道より餌の香気臭ぐ鬼を奪り道程に就きく意を疎にひけ  
半匹作らう。狗狐一名吼威と云

俣隈と云は某に云に名氏揚家を知り。永徳年中泉岳深  
南の古女持寺云々後醍醐帝元徳年中。因基。挑原。和南。檀那。小持氏と云く小持寺と云。後少の云ふありしむ

播磨頭耕雲菴の住僧氏伯を主とし。法守乃稲荷の神を信し  
毎日に法施をなす。或時法守の遠く三毛の狐をゆり。抱きかへ

若く言に此狐と云ふ靈ありて。狐を以て修ひし。使に狐を遊遊を防ぎま  
然の凶を告る。此狐乃子孫令小寺内小住とし。大徳は夏を程云小住

吼威と稱し。又狗狐とも云。彼狐は狐威。老翁にけし。本狐成が。狐云  
と熟視く。其能と稱す。於此狐の西。乃昔。龜と云く。口。信。之。

忽然して去る。是より大徳益妙を信し。此狐言。狐以て。家の大事と云  
道不達。ぬき。ひ。卵。奇。特。も。あり。く。く。く

○玄中記云。狐五十歳して。能く。變。化。に。百。歳。して。美。女。と。多。し。神。巫。と  
なり。又。ま。た。た。り。て。女。子。と。交。接。し。千。年。して。能。く。千。里。乃。亦。變。化。を。能。ふ。  
云。狐。と。云。く。く。く

本草綱目云。狐。狐。小。黄。黄。黄。狗。小。似。鼻。尖。尾。在。日。穴。下。伏。伏。伏。  
い。ゆ。食。肉。宿。む。嬰。兒。の。く。氣。極。く。腫。奴。其。性。疑。子。疑。子。疑。子。

以。今。須。と。云。は。故。狐。の。字。狐。は。信。者。に。疑。く。字。不。曉。く。故。捕  
者。ま。置。を。用。蓋。妖。獸。や。鬼。乃。乘。る。如。之。三。種。あり。其。在中。和。して

小。狐。は。黒。白。の。三。種。あり。白。色。者。を。稀。し。尾。小。白。淺。文。あり  
者。白。佳。其。腋。の。毛。純。白。是。狐。白。と。謂。ふ。其。毛。皮。裏。ふ。り。下。狐。死。る

と。狐。は。首。以。狐。と。氷。と。融。或。云。狐。は。媚。珠。あり。或。云。狐。百。歳。に。至。り。は  
北。斗。以。禮。と。變。じ。男。婦。と。交。り。以。て。人。を。惑。以。又。狐。尾。を。擊。て。く。く。く

穴。を。出。て。交。を。狐。懸。狗。と。畏。ふ。千。年。の。老。狐。子。年。の。枯。木。以。以。く。狐。懸  
く。く。く。真。形。を。見。し。つ。く。く











礼を履り山嶽の箇不（明）皇九年山嶽の箇不（古）文書あり（祇園會）  
 山嶽の事ハ近頃藤田貞宗（通）通祇園に在りてあり（増）浦祇園會細記  
 四巻氏著しと妻多む六海くると後

○八幡吉郎之圖 祇園 （後）之を繪してあり

○玄宗楊貴妃之圖 祇園

寶曆十二年

將野逸殿助永良画

○楊貴妃ハ蜀州の司戸楊玄琰之女小字と玉環と云ふ也白皇帝  
 第十八の皇子壽王の妃とあり玄宗帝其妃と壽王の官人とに之を眞  
 宮に納むと云ふ秘妻と云ふ。天寶十四年安福と云ふ亂ふと云ふ。帝貴妃  
 と亂れ進て蜀に逃れ終に中絶馬鬼が驛より六軍に執りて禍ひりと  
 楊國忠が死にたりと云ふ。國忠死し其妃とを縊殺り  
 都繪馬鑑五之卷大尾

# 書林

- 江戸日本橋通壹丁目 須原屋茂兵衛
- 日本橋通二丁目 山城屋佐兵衛
- 同芝神明前 岡田屋嘉七
- 日本橋通二丁目 小林新兵衛
- 同淺草茅町二丁目 須原屋伊八
- 大政南久室寺町心母橋南へ 塚屋新兵衛
- 同須慶町心母橋南へ 塚屋定七



